

令和紙



おりおりの記

## 東大寺「大仏さまのお身拭い」

東洋証券  
代表取締役社長

桑原 理哲

令和5年8月7日、午前6時、二月堂の湯屋で身を清め、白装束に藁草履で大仏殿に足早に向かう。今日は大仏さまに付着した塵埃を布で拭き清める年に1度の法要「お身拭い」の日。

東大寺は奈良時代の創建、「奈良の大仏さま」のお寺として、現代に至るまで広い信仰を集め、日本文化に多大な影響を与えてきた寺院です。大仏さまの正式名称は「盧舎那仏坐像」、華嚴宗教主として宇宙をあまねく照らす仏さまで、その大きく優しいお姿に接すると、全てを包み込んでくれるような安心感に満たされます。

さて午前7時、大仏殿に入堂。コロナ禍で一時中止となってしまった「お身拭い」ですが、私は前年に続き今回が3度目の参加となりました。

まずは大仏さまの魂を抜く撥遣作法が行われ、般若心経を唱えた後に、二月堂の湯屋で身を清めた白装束に藁草履姿の僧侶や関係者150人が、それぞれの配役場所で「お身拭い」の作業を開始します。配役場所はあらかじめ指定され、私は大仏さまの壇上の「大仏蓮弁」を清める配役となりました。

大仏さまを傷つけないよう、はたきを使って埃を落としていくのですが、初参加の時は、はたきとはいえ、大仏さまを叩いてよいのか躊躇したのですが、「撥遣作法」により大仏さまの魂を抜いた状態なので心配無用のことでした。

大仏さまは高さ15m、顔幅3.2m、手のひら2.5m、以前手のひらに登った時は、下を見下ろすのが怖くなるほどの高さでした。大仏さまの髪の毛螺髪から埃が粉雪のように舞い降りるのですが、「埃を被るとご利益がある」といわれていたため苦ならず、充実感のあるお勤めとなりました。はた



き掛けの次は白雪ふきん（浄布）で、大仏さまを磨く作業の浄拭に入ります。

昨年の夏は猛暑、午前7時でも気温は上昇していましたが、なぜか白装束で包まれた体からは汗が出てきません。これにはわけがあり、大仏さまの体は銅で鑄造されており、その関係で大仏殿の気温が低いのです。

午前9時30分、炎天下の「お身拭い」作業は終わり、その後の「開眼作法」により大仏さまの魂が元に戻され、大仏さまの新しい一年が始まります。

大仏さまの清々しい姿を見上げ、心が浄化される中、大仏造立のきっかけとなった疫病鎮めの由来に思いを馳せ、新型コロナ沈静化と証券界の健全なる成長をお祈りした次第です。